

〔倭訓栞末前編二十九〕まゆ 眉をよめり、目上の義、うへ反え轉じてゆとなる也、又日本紀にまよともよめば、目依の義にや、出羽にてまゆけを、まみあひとも、こぬけとも、常陸上總にてやまといへり、今長崎平戸の婦人は眉を去す、近江君が畑といふ所は、伊勢員辨郡に隣る一村の婦人、眉をそらす齒を染す、惟喬親王の住せ給ふといひ傳へり、奥の柳川あたりも婦女眉をとらず、婦人眉を去ることは、唐文宗詔に、高髻儉粧去眉開額と見えれば、唐より倣へるにや、

〔和漢三才圖會十二眉音 眉本字 和名萬由介 言目上毛也〕

按唐書云、袁天綱見岑文本曰、眉過其目、文章振天下、果然焉、今又俗所傳、眉毛中有長秀者、爲長壽之徵、多試之不差、又云、左眉稜骨痒、則將逢戀人之兆也、

〔日本書紀一神代〕一書曰、略 保食神已死矣、唯有其神之頂化爲牛馬、○中 眉上生鬣、

〔萬葉集十一古今相聞往來歌〕問答

今日有者、鼻之鼻之、火眉可由見思之、言者君西在來、

〔萬葉集十三相聞〕荒玉之年者、來玉梓之、使之不來者、霞立長春日乎、天地丹思足椅、帶乳根笑、母之養蚕之、眉隱氣衝渡、吾戀心中少、○少 恐 人丹言物、西不有者、松根松事遠、天傳日之間者、白木綿之、吾衣袖裳、通手沾沼、

〔源平盛衰記十八〕文覺高雄勸進附仙洞管絃事

カ、ル處ニ文覺勸進帳ヲバ左ノ手ニ取渡シ、○中 眉ノ毛ヲ逆ニナシ、血眼ニ見テ庭上ヲ狂廻ケレバ、思懸ヌ俄事デハアリ、コハイカマセント、上下騒ゲリ、

〔増鏡秋十三〕公泰宰相中將、劍璽の役つとめらる、さくらもえぎのうへのはかま、かばざくらのまたがさね、山ぶきのうきをりもの、きぬ、紅のうらたるとへをかさねられたり、まろくまるくこゑたる人のまゆいとふとくて、おいかけのはづれ、あなきよげと、たのもしく見えられし、